20.

プリントアウトした請求票は、所蔵部署階のカウンターにお持ちください

2011年01月06日 11：38：56

入館証番号：

＜請求票＞
Call Slip

2227
58
2

資料名：尾崎秀実著作集

巻次　：第2巻

著者名：尾崎秀実／／著
出版者：勁草書房　頁数　：402p
大きさ：22cm　出版年：1977

所蔵館　：中央
所蔵部署　：1階資料お渡し・返却カウンター

配置場所　：1/66A 中)B1書庫A
資料ＩＤ　：1122325562

一 社 人 自 東 新 ↓ 一 社 人 自 東 新	力	事
	請求	報告

MB１	ﾏｲｸﾛ	B1	ｱﾙﾌｧﾍﾞｯﾄ	原紙	縮刷	
MB２	ﾏｲｸﾛ	B2	洋	中	朝	

行	1F	B1	B2		
多	児	青	1F	B1	B2

切り取り

2011年01月06日 11：38：56

入館証番号：

Call Slip

＜請求票＞(控)

書名
資料名：尾崎秀実著作集
巻次　：第2巻
著者名：尾崎秀実／／著
出版者：勁草書房
出版年：1977
大きさ：22cm
頁数　：402p

『現代支那論』
(1937)

所蔵館　：中央
所蔵部署　：1階資料お渡し・返却カウンター
配置場所　：1/66A 中)B1書庫A
資料ＩＤ　：1122325562

請求記号
2227
58
2

目次 P. 2 −5
P. 195 −210

かかる観点に於て、筆者は現代支那をその社会の本質に触れて何等か理解せんとする一つの試みをここに採り上げんとするのである。我々の見るところではこの企ては支那社会の全般にわたり綜合的に把握するのでなければ目的を達し能わぬのである。いうまでもなくこれは極めて困難なる企てであり、我々の容易に成し得るところではない。しかしながらこのことは何人かによって試みられねばならない事であるし、かつ今や最もその必要の高まりつつある時期である。かかる意図を持つ人々にとって多少参考になり、或いはその批判の対象になることが出来ればそれを以てこの小論の目的の大半は達せられたと考えるのである。

支那社会の二大特性

支那社会、殊に支那の現代社会というものは、これを摑むことに非常に多くの困難を感ずるのである。その理由は支那社会が、その彫大な外貌に現われた如くその拡がりにおいて非常に茫漠としているという事情にもよるが、それよりも更に深く、この実体というものの内容が非常にバラバラであり渾沌としているという事情の為に、それを適当に把握することが困難なる為である。しかしながら、仔細に点検すればこの一見極めてバラバラであり渾沌としているかに見える支那の巨大な国体も、たとえあらゆる隅々を余すことなく摑むということは勿論困難であるとしても、又極めて長い年月の努力を要するとしても、なお全然不可能でないと考えられるのである。我々の先輩である多くの所謂支那通の人々、日本にいるよりも更に何倍も長く支那にいたというような人々がこれを試みた場合に於ても必ずしもそれは成功したとは言い得なかったのである。彼等が支那について語る所を聴いた場合に於ても必ずしも本質的な点で支那を正しく観ていると言えない場合が我々にすらしばしば感じられるのである。その原因はこれらの人々の場合においては、我々の本質的と見る点或いは中心と目すべき点を或る場合には

看過して、却って本質的ならざるしかも一見頗る興味があり、或いは注目を惹く種類の事実に目を注ぎ、そこに心を傾倒するということに多くの場合基因すると考えられる。ここに我々が現代支那社会というものを全面的に把握せんとする場合においてはかくの如く、漠然と系統無く全般に触れんとする態度は本質を逸する所以ではないかと思われる。かくて我々のとるべき方法はかえって現代支那社会の特質となるべき点を一、二捉え来って、それを中心に検討し、解剖を進め行くという方法である。また事実それ以上は我々の到底なし得るところではないのである。

現代支那社会の特質として一般に言われるところは、いかなる点なりやというに、一般的な表現に従えば、支那社会における所謂半封建性なる事実と、半植民地性という事実に帰着するのである。この半封建性と称する事実については、「半」なる字は特別の数量的な正確さを要求するものでないことは明瞭である。要するに、封建的な性質が極めて多く支那社会に残存し、しかもそれは決して重要ならざる作用をなしているものではなくして、相当に重要なる作用を現代支那社会の動きの中に、営みつつあるということを意味するのである。勿論この場合においては、普通半封建性という場合に於ても、言葉の厳密なる意味における所謂封建性のみにとどまらず、更に広くその他の性質、おしなべて現代の資本主義的な社会に到達する以前の社会における様々の遺された性質が、すべてこの半封建性の語の中に包括されているということは理解されねばならないのである。

支那社会におけるこの半封建性という事実は、その他の今一つの特徴たる半植民地性なる事実と共に、過去二年に垂んとする日本との抗争の経過の裡に、完全にその性質を外部に露呈し来ったという事実は、既に多くの支那社会研究者によって認められたることである。これは要するに、戦のはげしさが、支那社会の資本主義化の過程を引きとどめ、かつ根底から支那社会を揺り動かして、未だ本質的に近代化していなかった支那社会の仮設的な艤装を、ふるい落したためであると思われるのである。

日支事変の起る少し前、即ち昭和十一年の四、五月頃に於ては、現代支那社会が、既に完全に資本主義的な社会に到達したとする見解がにわかに抬頭したのであった。一方においては支那の国内統一は急速に進み、又支那側の所謂経済建設（国内経済開発）が次第に顕著となり、これにつれて、もはや支那社会の特質は所謂半封建的ないしは半植民地的というが如きものではなくして、完全に近代化された資本主義的な社会であり、その中に纔かに前時代の遺性が残って居るのである、という考え方がかなり強くなって来ていたのである。この考え方はいわば世界的な風潮で、日本の側においてもかなりそういう見方が強くなりつつあったことは多くの人の記憶するところであろう。我々は当時支那がかかるものとして発展することはこれを歓迎すべき理由が充分あると考えたのであるが、しかしながらこの考え方は、現実とはかなり遊離するのみならず、危険な考えでもあると、ひそかに考えていたのであった。かかる考え方が元来どういう所に基因したかと言えば、一つには国民政府がその

現代支那批判

自序……1
一、支那政治批判……3
南京政府論……3
支那における列強……15
日本の大陸政策と満州・北支問題……26
支那に於ける英国の勢力……37
中国国民党・共産党関係史……48
二、日支時局批判……60
北支問題の新段階……60
時局と対支認識……66
支那事変と列国……73
敗北支那の進路……80
国共両党合作の将来……87

長期抗戦の行方……94
長期戦下の諸問題……103
支那事変第三期……111
漢口攻略の意義……119
漢口戦後に来るもの……124
三、支那経済批判……129
支那の経済建設批判……129
支那における貿易と関税政策……153
日支事変と国際資本……160
日支事変と支那経済……175

現代支那論

自序……195
緒言……196

支那社会の二大特性……198
支那社会の複雑性の根拠……202
支那社会と歴史的停帯性……207
支那歴史の区分……210
歴史の制約と現代支那……220
現代支那の特徴的諸様相、封建的諸要素の濃厚な残存……223
支那と列強資本……243
民族運動の特質……265
国民党と共産党の関係……275
支那の変貌……282
評論（一九三七・一一～三九・一二）
周恩来の地位……289
内蒙古独立の重大性……296

蔣介石よどこへ行く……299
日支事変と独逸……304
「東亜協同体」の理念とその成立の客観的基礎……309
蔣政権の衰頽と新政権の前途……319
東亜政局に於ける一時的停帯と新なる発展の予想……340
東亜新秩序論の現在及将来……350
太平洋の新秩序……359
汪兆銘問題の新展開……368
汪精衛政権の基礎……375
尾崎秀実と中国……野村浩一 379
解題……今井清一 396

緒　言

現代支那の姿を正確に掴むことは非常に困難な事業である。かつて支那は世界の謎であると言われていた。今でも支那を不可解な国と考える者が多いと思われる。確かに一応理由のあることである。試みにわが対支政策などに就いて見てもはたして十分の見透しを以って支那に対する対策が今日まで行われていたかどうかという点に到ると、少くとも過去に於ては、我々をして一種の不安疑問を覚えしめるような場合も少くはなかったのである。又これまで支那に就いていろいろ述べられた事柄についても、果してそれが真実の支那の姿を描き出したものかどうかということについて、疑問を持たしめた場合が非常に多かったと思うのである。

現在我国は支那との間に真に歴史始って以来の、少くとも東洋史がかつて知らなかった非常に凄惨な深刻な闘争を行いつつある。この結果について我々は今日種々なる角度から種々なる予想を行いつつあるものの、果して何人が確実な見透し、予想を持っているのであろうかを思う時、一種の感慨を覚えるとともに身のひき緊るのを感じるのである。しかしながら我々はとにかく歴史の指さす方向に向って黙々として突き進んで行かなければならないのであるが、それにしても我々の感ずることは、支那というものの正体をまず確実に掴む努力が絶対に必要なることである。

過去の我々の経験に依ると、支那は昔から隣に存在しあの様に経済的にも政治的にも多くの繋がりを持ち、しかも歴史的に過去を顧みれば非常に長い接触面を持っているにかかわらず、日本人が現代支那に就いて知る所が意外に僅かであるということは否定し得ない事実である。これはいかなる原因に基づくものであろうか。これを顧みて不思議に思うものは少くないであろう。簡単な卑近な例を採って見ても容易に示し得る事であるが、直接に現代支那というものを学問の対象として採り上げることは、正しく科学の領域となり、対象となり得るにかかわらず、今日まであまり行われていなかったということは、不思議なことといわねばならない。支那学というものは存在していた。しかしこれはもともとヨーロッパの学者が支那を遠い世界の古い珍しい社会として概括的に取扱うことに基礎を置いているのであり、その対象たる支那は、遠くに置かれた古い支那であった。今日現代支那の各種領域を対象とする新しい講座が各大学の中に設けられようとしていることは、日支事変の経過によって始めて生れた要求に他ならないのである。更に又、今日ようやく問題になりつつある中等学校で支那語を正課として教えるという問題の如きも、我々は既に古くからその必要を主張していたのであるが、問題となり得たのはこれまた事変の現実の要求に促されたためである。支那の古典たる漢文に就いては、

日本人は少年時代から非常に深い接触を持って来たのであるが、この漢文を通じて吾々が想像し描く所の支那社会というものと、現代に於ける支那社会というものは殆ど何等の繋りを持たないまでに隔っているのである。しかも何千年もの事実上の飛躍、隔りを忘れて、それが現実の支那理解の唯一の尺度としてしばしば錯覚され誤用されるところに最も大きな問題がある。古典の支那社会と現代支那社会とに橋かける大きな努力は従来殆ど無視されていたといっていいのである。

我々が現に経験しつつあるこのような大きな事件の発展の仕方の中にも、又ここに到るまでの進行過程の中に於ても、かくの如き支那に対する認識の不足、或は関心の不足というような事情に基づく欠陥は遺憾なく現われているのではないかと思われるのである。

これについて筆者には一つの思い出がある。一昨年の七月七日は日支事変の発端である北京郊外の蘆溝橋に於ける日支軍の衝突の日であるが、東京ではかねて日支関係の緊迫と共に、何とかしてこの状態から新しい解決方法を見出したいと考える人人の間に日支文化協会といったようなものが出来て、この夜、その第一回の会合が開かれたのであった。支那側からも、在京の有力者で今支那の奥地で活動しており、最近国民党の中央宣伝部の首脳者の一人となっている陳博生（この人は当時中央日報の東京特派員であった）、横浜の総領事であった蔣といったような人々が出席していた。まず日本と支那の現状について忌憚ない意見を交換して見ようというのであった。この日の会合に於ては、日本側は主として日本内地の政治方面の第一線に活躍している若手の新聞人が中心であったのであるが、ここに於て我々は今更日支双方の立場のあまりに遠いことを痛感したのであった。

日本人一般の支那に対する認識が驚くべき程低いこと、或は支那に対する関心が薄いことは先に述べた如くであるが、これは支那側についてもまたいい得ることであって、支那側の日本に対する認識は更に驚くべく低いのである。支那人の日本に対する関心というものは一種特別な理由をもって、急速に近年高まって来たのであるが、しかしながらそれにもかかわらず、日本に対する正確な認識というものについては非常に欠如していたということを断言し得るのである。この夜の会合に於て我々は両国の知識人の間に於てすら、いかに深い溝が存在しているかということを深く感じたのであった。我々が殆ど無益なる討論に夜の更けるのを忘れつつあった時、歴史的瞬間は刻々近づきつつあったのである。交戦二年に垂んとするその間に於て、支那側に於ては、了解に苦しむ程の認識の欠如と現実を遊離した日本に対する観察とが続けられつつあることは事実であるが、支那側の日本に対するこの態度は別問題として、東亜に新しい秩序を建設せんとして発足せる日本――勿論この東亜の新秩序の建設は日本だけの一方的な力をもってして達成し得るものではないが、とにかくもこの大事業遂行を標榜し、その中心となって進む日本の側に於ては、大陸に対する認識を十分深く把握せねばならぬであろうと思われるのである。

国内統一をしゃにむに強行しつつあったについて、その必要上外国に対してもかかる姿勢を多く示すことを得策とし、また一方、列国の側からも、国民政府のかかる進行方向を喜ぶ理由があったためである。支那に強力なる中央政府の出現することは、世界経済恐慌以後著しく支那の市場ならびに資源に対し、関心を増した列国の支那を安定せしめんとする要求に適うものであったし、また他方大陸に近来非常な勢で進出し勢力を増大しているように見える日本に対して、一つの牽制策として、国民政府を或る程度まで援助し強化せんとする希望ないし要求がこれに加った為であったと思われるのである。従ってこの現象は国民政府を単に好意的に援けるというが如き意味でなく、また国民政府を特に高く評価する意味ではなかったのである。

以上の如き内外の政治的要求に基づいて、支那の資本主義的発達が非常に強く言われ、それに関連して支那社会における封建的な性質或いは植民地的な性質が、もはや主要な性質ではないとの議論が強くなったのである。

半植民地性なる言葉は、先に述べた半封建性の場合と同様、特に分量を現わす言葉ではなくして、支那社会の中に、非常に多くの度合を以て列国の植民地的な影響力が及んでいるということを意味しているのである。支那国家は当然支那社会の上に立っている国家であるが故に、支那社会の特質は完全に余すことなくその国家機構の中に反映している。支那社会の中に列国の勢力或いは影響力が強く支配的に働いているという関係が存する以上、これは支那の国家機構に支配的な影響を持つことと

なるのである。勿論この場合国家機構に対する列国の支配力は直接な場合が多い。この半植民地性なり半封建性なりを並べて言う場合に注意しなければならないことは、この両個の性質が必ずしも正確に均衡を持ったものではなくして、例えば、或る時期においては封建的な性質というものが支配的に現われ、また或る時期に於ては半植民地性が最も強く現われるという如き関係にあることである。また両個の特徴が相互助長的関係にあることである。この半植民地性は支那社会の封建性の基礎の上に発展したものである。植民地関係の進行が、支那社会の封建的勢力との結び付き、その利用によって促進されたことも事実である。列強の軍閥的勢力利用の場合は最も明らかであるが、経済的関係においても全体としての封建的生産関係の利用にあらゆる考慮が払われた。現代支那社会機構の呈する様相が種々なる時期、角度によってその表現を異にすると言う如き関係は以上の理由に基づくところが多い。かるが故に、我々は先ず、現代支那社会に入り込んでおり、或は残存しているこれ等の二つの性質が、現代支那社会に於て特質的であるという一般的な、何人にも異議の無い事実を認めることから出発したいと思うのである。

現代支那社会の特質という点について、前述の二点が重要なる特質であるということは今ではあまり問題ではない所であるが、しかしながらここに我々にとって更に重要なことは、これ等の性質、支那社会の特質たる半封建性なり半植民地性なりを、極めて具体的に且つ統一的に摑む必要があることである。その

努力なくして、単にかかる性質が強く支那社会に残っているという事実を認めるのみならば、これを以てしては支那社会を分析したというには足りないのである。例えばこの半封建的社会に於ても、一方においては資本主義的な発展が行われつつあるということは事実である。又半植民地的性質を支那に齎す列国の影響力についていうも、或る時期に見られた如き、列国が相競うて行う直接の領土の取得、或いは鉄道の自国の資本による建設、或いは勢力範囲を劃定するという如きものではなくして、支那の金融部門の内に、或いは財政部門の内に根強い影響力を及ぼして来るというが如き方法に置きかえられているのである。それは一見支那が半植民地的な影響を離脱するものの如くにも見える。しかしながら実質的には、この関係は却って列強の影響下に支那をますます沈淪せしめるということになるわけである。これは以前の方法にも増して支那にとっては重大な意味を持っている。譬えて見れば、足を拖いだり手を拖いだりされるよりも、心臓に喰入られ心臓を侵されることの方が、生命それ自体から言えば、却って危険性が多いという場合と同じである。

この支那社会の特質を具体的に摑まねばならぬということは、我々が重大な関心を持つ当面の対支政策の場合などにおいても、殊に重要な意味を持つのであって、正確な対策を樹て、それに基づいて支那に要求し、或いは支那との抗争を続けることが必要である。この事変勃発初期に於ても、英国の勢力なりその他ソ連の勢力なりが、支那社会において巨大な実勢力を有しているという事実について、かなりよく言われたところであった。それは単に支那に対する列強の投資なり、貿易における関係なりを示すことが主として行われた方法であった。この種の方法は勿論列強の勢力を具体的に摑む一つの方法ではあるが、これのみを以てしては足りないのであって、支那社会の如く、極めて厖大な外貌と複雑な内容を持っており、国の内には列強の勢力の浸透の様相もまた極めて複雑な形で入り込んで来ているわけであるのであるから問題を静態的に取扱ったのでは不充分である。又漠然とイギリスの支那に占める勢力が非常に強いからイギリスに対してはかくかくすべしと言うが如き議論や主張は問題を解決する力とは全然ならないのである。更に具体的に、イギリスの支那に対する歴史的地位、その現有勢力、支那に対する接近の仕方、或いは勢力浸透の特殊性というが如きものが明らかにせられて、しかも世界情勢の推移と睨み合わせ、その政策は今後これこれの方向に推移する、随って我々は、これこれの所でこれこれの方法を以て対処しなければいけない、というに到って始めて妥当なる政策が樹立されるのであろう。しからずして単にイギリスの勢力の強大なることを実証するに止まるならば、かるが故にイギリスの勢力を打倒すべしとの主張と、かるが故にイギリスとの協調を一応必要とすべしとの全く正反対の結論をすら生じ得るのである。

半封建性の場合に於て最も大きな問題となるのは、支那における軍閥の問題である。ことに現在の如き抗争の場合に於ては特に注目さるべき問題である。しかしながらこの場合に於ても、

単に支那の軍閥が支那社会において求心的傾向をとる中央政権に対して遠心的な傾向を持っており、常に分離独立を望み、或いは自己の地盤を護らんとする性質のものであるということのみを知るだけでは不充分である。これに対する政策としては、進んで某々の軍閥は、かくかくの経済地盤を占めており、しかも内外の人的関係はかくかくである、更に列国との関係はかくかくである、というが如きことを明らかにし、何よりもその現在の政局における地位を知った上で始めてこれこれの対策を講ずべしとの結論に到達しうるのであろう。これは支那社会の分析の問題であるよりも寧ろこれに対する実際政策の上の適用の場合であるが、いずれにせよ、抽象的、観念的、或いは静態的なる理解の方法ではなくして、具体的、実証的、動態的なる分析の方法をとることが必要であることはいうまでもないところである。

支那社会の複雑性の根拠

現代支那の持てる外貌の極めて複雑なることの理由の一つは、支那社会がその生産関係において複雑なる系列をなしている点である。極めて原始的な生産様式から高度なる生産様式までを悉く含んでいるという点は極めて特徴的である。例えば、これを生産力の発展段階に即して見るに、蒙古の草原に遊牧する人達と、上海等の大都市で近代的な産業を営み、或いは浙江財閥の牙城たる銀行の経理室に納まる銀行家との間には非常に大きな差異があるが、これは単に均衡のとれた社会の中の職業別の問題ではなく、生産関係の本質的差異を示している。支那の奥地の農民の生活は近代都市の労働者とは全然別の態様を示している、これについても同様のことが言い得るであろう。これら相互の併存的な関係は、我が日本の社会、或いは更に進んだ所の高度の資本主義国家の社会の中には殆ど見られない所である。更に他の面から観察すれば支那の資本主義的発展を言う場合に、上海、天津、青島、広東、漢口と言うが如く外国との海による直接の接触を持つ地域が、非常に資本主義的に発達しているという点がしばしば言われるところである。しかしながらこれも概括的、一般的、或いは外観的の場合であって、試みに内に一

歩深く入って観察する時は、そこに最も後れた封建的な生産関係が同居していることを発見するのである。高度の資本主義的生産関係の外に、封建的な生産関係が存在し、而も後者はその拡がりにおいて、それに従事する人間の数の多さにおいて、はたまた生産の量に於ても経済的に重要なる地位を占め、勢力を有しているというが如き関係である。従って支那の近代都市における性格は都市の最も進んだ経済的な面のみよりしては理解し得ない所である。支那の海辺経済都市地域を除く広大なる地域は農業地帯であると普通には規定される。しかしながらかかる支那の奥地を一概に農業地帯と概括することは不充分である。この奥地の農業地帯の中には実は幾多の段階が存在するのであって、しかも異質なものが併存する関係は極めて不均衡であって、非常に進んだ部分があるかと思うと、直ぐその附近には極めて後れた部分があるという状態である。一つ一つの農村の部落なり、城市を中心とする地域なりが、分散的孤立的状態をとる傾向が強いのである。

支那社会における特性の第一の点、支那における半封建的性質、更に正確にいえば資本主義段階以前の諸性質は農村関係、農業生産関係に最も多く見られるのである。言うまでもなく、支那においては農村生産関係は最も重要なる地歩を占めるものであって、支那の全人口の四分の三以上が農業人口であり、国民収入の五分の四が農業関係の収入である。この農業の領域に前資本主義的性質が最も多く残存しているのである。その中には農村共同体に近い性質のものが殆ど独立に外との連絡を断ったような形でもって存在している場合もある。それは支那の古来からの氏族制以後の大家族制と関連するものである。四川省の或る部分、山東省、或いは南支那にはこのような農村共同体的な性質の村落が見受けられるのである。ここに於ては父系、父権、父治の制度が特徴的に現われている。宗族的系統を中心とし、これを規律する所の掟を持ち、その先祖の祭をする祠堂というものを持った、そういう種類の一大同族をもって構成された一つの村落というものはしばしば支那の奥地に見受けられる所である。氏族共有の公地は南支には多数存在する。例えば広東省の耕地の三分の一が「族田」であるといわれている。奥地に於ては又原始共産制的とすら見られるものが残存している。更にまた奥地農村などには純粋に奴隷制的遺制もまた顕著に残っている。この関係はなお農村内部における諸関係、殊に小作人の地位などの中に、これを見るのである。奴隷的なるものは日本などの場合とは異って、農業関係においては奴隷、半奴隷的な地位が奥地農村の下層農民のうちに残存しており、その他の領域に於ても鉱山労働者であるとか、或いは碼頭の苦力であるとか、人力車の車夫などの中にかかる奴隷に近い制度がかなり広く見られるのである。しかしながらこれらは外面的にはそうであるが、実質的には、寧ろ封建制が内容をなしていると見ることが正しいように思われる。小作人の地位は封建的な農奴の性質に最も近い。

封建的な関係に至っては、現在の支那の農村諸関係の中に於てかなり広く一般的に認められる所であって、極めて高率な小

作料の納め方というようなものの中にこれを見出すことが出来るのである。農村及び都市にある高利貸の如きもそのような性質である。都市についても封建的な諸関係は残っているのであって、例えば我々が普通に見うける所の支那の大きな銀楼（銀細工の店）、絹などを取扱っている店、そういう所の徒弟、及び種々なる手工業に従事する所の徒弟などはそれである。就中この封建的な関係の残っている最も明瞭なものとして問題となるものは、政治的にも社会的にも重要な地位を占めている軍閥の存在である。或る意味において封建的な残存形態のうちの代表として我々はしばしば支那の軍閥を挙げるのである。

支那では軍閥を一代すればその富の余沢は数代に亙るといわれる位であって、今日我々は天津とか上海とか或いは香港とかいう如き外国の租界、又は外国の直接の勢力下にある土地に於てこれ等の軍閥の子孫が非常に楽々と富裕な生活をしているのを見うける。かの東三省王張作霖・学良父子の豪華さはなお人人の記憶に新たであろう。かつての広東の主陳済棠はその富一億元を下らずと噂され、彼の富は現に安全に香港に保管されているという。これらはかつての軍閥というものの搾取がいかに苛酷なるものであったかを物語るものである。それらの利益は封建的様式に基づいて備えつけられたポンプによって吸い揚げられたものであったことはいうまでもない。この軍閥も近年における支那の政治、経済関係の変遷につれて変化して来たことは事実であって、我々が今日見る地方実力者としての軍閥、辛亥革命以後の軍閥、清朝末期の軍閥と、各々その性質が多少違っているのである。しかし地方的にその割拠的な地盤を持ち、その領域においては中央政府の直接の支配から殆ど離れて、依然たる中世の封建君主の如き勢をもつの状を呈していたのである。この半封建的な勢力は今日においても支那の抗日政権の内に持ちこまれていることはいうまでもない。その代表的なものとしては、辛亥革命以来独立的地位を保ってあたかも山西王国の観を呈していた閻錫山とその一党、或いは大広西軍閥を形成していた広西省の李宗仁、白崇禧、更に雲南の土着軍閥で省主席である竜雲、これ等を封建的勢力の代表と見てよいであろう。その他四川において事変の始まった年の冬死んだ劉湘、西康の支配的軍閥である劉文輝等、更に劉湘の旧部下の雑小軍閥など、軍閥的勢力は少くない。もっともこの種の軍閥の勢力、その軍閥としての地盤が既に大部あやしくなって、単に地方的勢力にしか過ぎない、いわば地方に実力を占める軍人にしか過ぎないという軍閥、例えば今国民政府の内政部長である何健の如き勢力もある。山東に拠っていた韓復榘、これは戦争の初めの年の暮山東敗退の責任を問われ漢口に於て銃殺されてしまったのであるが、これは周知の通り万年洞ヶ峠に居た支那政界の惑星であった男である。筆者は事変の始まる前年済南の省政府内の彼の居室で彼と対談し、彼のあやしげな日支親善論をきかされたことを思い起す。今更ながらその以後の東亜に起った変化のめまぐるしいまでのはげしさを思わずにはいられない。更に一九三五年十二月以来冀察政権の主であった宋哲元がある。これらは同じく軍閥的な勢力ではあるが、やや近代軍人的な性質を持

ち、封建的要素が幾分薄いという地位に在る軍閥であった。かくの如く封建的な勢力はかなり多く残されている。孔子の七十七代かの後裔である山東省曲阜の孔徳成は今度支那軍の為に奥地へ連れて行かれたのであるが、この孔子の後裔は全く中世の諸侯の如き地位を有していた。彼は自己の荘園（面積約四万八千畝）と多数の農奴と護衛兵を持っていた。又支那の奥地にある有名な寺などには多くの寺領、荘園をもっているものも少くないのである。山西の五台山は五台県第六区の耕地を殆ど所有し、江蘇省宿遷の極楽庵は五華頂其の他四ヵ処に合計二十万畝の田を所有し、和尚の如きは県政府の十倍も立派な邸に住み妻や妾を擁して収租、放債を仕事としている。その他江蘇泰州の光孝寺、河南南陽の玄妙観、鎮平の菩提寺、蕪湖の広済寺、廬江の実際寺、四川の文珠院等は各数千畝の寺廟地所有者である。（天野元之助氏、昭和十二年版、『支那経済年報』中参照）

これらの点は支那の所謂半封建的な特徴についての一、二の例を挙げたのであるが、支那の今一つの特徴である半植民地的なるものの特徴の個々の点に就いては、列国の勢力に関し具体的に後述する場合に譲ることとする。ただ一般的な相貌を述べると次の如くである。

孫文はその三民主義の講義の中で――それは一九二四年の二月三日の講義であるが――支那はどこか或る一国の植民地ではなくして、支那に利害関係を有する数多の国の植民地であると言っている。孫文は「三民主義」の他の個所でまた次のようにも述べている。

「政治力の圧迫は容易にその痛痒を感じ得るが、経済力の圧迫はそうでない。中国（支那）はすでに幾十年来列強の経済力の圧迫を受けたに拘わらず、一般にさして痛痒を覚えず、結局中国各地は挙げて列強の完全な植民地と化してしまっているに拘わらず、全国人は今尚列強の半植民地となったと考えているに過ぎない。半植民地という言葉は自慰的なもので、その実中国は列強の経済力の圧迫を受け、本当の植民地より更に不利な立場に置かれているのである。従って中国を半植民地というのは適当でない。まさに『次植民地』[註]と呼ぶのが至当だろうと思う。この『次』という字は、化学の名詞から得たもので、例えば次亜燐は薬品中燐に属するものであるが、燐よりその質一等低きものを亜燐と名づけ、それよりも更に一等低いものを次亜燐と称するものと同様である。中国人は従来ただその半植民地たることを知って非常な恥辱と心得ていたのであるが、その実際的地位は、朝鮮安南の如き真の植民地よりも一段低いのである。故に我等は中国を半植民地ということは出来ない。次植民地と呼ばなければならない。」

もとよりこの表現には幾分の誇張があり、かつ何故に支那が純粋植民地以下であるかの理由も必ずしも明瞭ではない。しかしながら孫文には支那の当時の現状が植民地以下と感じられたことは確かである。

註　支那のうちにも「次植民地」の語を半植民地の意味に用いているものもあるが、しかし文の用語の意味はそうではなかったのである。孫文は何とかして列強の桎梏から支那を解放しようと考えた

わけである。最初には日本に最も信頼し期待したのであった。この同じく東洋に国する新興帝国の力を借りて欧米の圧力を払い除けようと試みたのであったが、日本との関係は予期どおりに進まず、また欧洲大戦中に発展した、日本及び支那の内部における急激な変化が両国の対立部面を激成し、又一方には世界的な民族自立の風潮、ソ連の革命等の事情に大きく影響されて最後に結局ソ連に走るに到ったのである。ところで支那の植民地的な状態について孫文はその三民主義の講義の中で、かなり粗雑な計算ではあるが、次の如く計算している。

「その植民地たることに因っての損失というものを合算すれば、第一、外国品の侵入によるもの五億元、第二、外国銀行の紙幣が我が市場に侵入し、為替の換算預金の転貸等によるの損失が約一億元、第三、輸出入品の運賃が数千万ないし一億元、第四、租界と割譲地の租税、地租、地価の三項目が、四、五億元、第五、特権による営業が一億元、第六、投機事業其の他に依って剝奪されるもの約六千万、この六項目の経済圧迫が我々に加える損失は総計十二億元を下らない」

という風に述べているのである。勿論支那の所謂半植民地的状態を作り出している、この列国の影響力というものは単にこれ等の経済的利益ばかりでなく、更に今少しく広汎な領域に亙るものであるということは言うまでもない。

以上筆者は、現代支那社会の特徴を、その基本的な点に於て捉え、これを半封建的、半植民地的と規定して描いたのである。しかしながら、更に深くこれらの特質の根源として感ぜられることは、支那の社会が非常に立遅れているという事実である。而して、この立遅れを現代支那に齎したものは、支那の通って来た過去の長い過程に現われた支那社会の停滞性であろうと思うのである。勿論支那社会は或る学者の言うように、今日まで全体として社会の持つ生産力の水準を低めたわけではない、全体としてやはり上向線を辿って来てはいるのであるが、その期間の中で幾つかの区分に分ち得る発展—完成—爛熟—頽廃の繰り返しがあったために、全体としてのこの上向線が極めて緩やかな、低い角度による上向ということに帰着したのである。それは非常に長い停滞性を支那社会の特徴として与えることとなったのである。

支那社会と歴史的停滞性

現代支那の特質は、結局長い歴史を通じて持たれて来た支那社会の特質の現段階的表現であることは言うまでもない。かかる長い歴史的に見た支那社会の特質の上に築かれたものが、現代支那社会の半封建性及び半植民地性となって、現代支那社会の特質を形作っていることは間違いのないことである。即ち現代支那社会における半植民地性は、支那社会の立遅れないし停滞性が根本的に存在し、かかる条件下の対外的接触面を卒然として持つことによって急激に展開され構成され、現代支那社会の特質をなすに到ったのであるが、しからばここに立ち至らしめた社会的立後れの原因は何であったかという点を探究する必要があるであろう。また支那の半封建性に就いても、かかる封建性が何故長く保たれたかの点は十分考察の必要があるであろう。

しかしてこの両者の原因は共通のものでなければならない筈である。これは支那社会の歴史的発展の過程に求めねばならないのである。この支那社会の歴史的な基本的性格は何処にあるかといえばこれは人によってその見解を必ずしも一つにはしていないようである。

この問題に関連して所謂「アジア的（東洋的）社会」ないしは「アジア的生産様式」の問題に一瞥を加えることとしよう。

勿論筆者は既に多くの人が論議をくりかえしたこの多少小うるさい問題を、ここでとり立てて論じようとするものではない。「経済学批判」の著者は「極く大づかみに言えば、アジア的、古代的、封建的および近代ブルジョア的の諸生産様式が、社会の経済的構成の進歩の段階であるということが出来る」とのべて、「アジア的生産様式」を社会系統の一段階と見、古代的生産様式に先行する一社会系統に位置せしめたのである。この意味に於ては「アジア的」なる言葉は地域的区分を意味せず、世界史的、人類史的範疇であるとすることは正しい。[註] 従ってその内容としては原始的な農業共同体が意味されたものであったと思われる。

註　森谷克己氏、『アジア的生産様式論』参照

アジア的生産様式論の無数の解釈とこれに関する論争の起りは、無論この言葉の創唱者の意味の理解の不充分にもよるが、それよりもこの言葉によって何等か支那社会の特殊性を説明しようと試みたところから起ったのであると思われる。

アジア的生産様式の特徴として、従来あげられた諸特徴の場合においても、それは創唱者の意味した限定された意味ではなくして、支那社会を根拠として考え、一方時代的にも厳密な区分を置かずして言われた場合が多かったと思われる。つまりこの場合においてはアジア的生産様式はひろく歴史的に見た支那社会の特徴を総括するものとして考えられたのである。

従ってこの場合に於てはアジア的生産様式たる東洋社会の特質は、農業共同体たることと並んで、土地私有の欠如、人工灌漑の必要とこれに対応する大規模の公共事業組織の必要、国家形態として専制主義等までもひっくるめてあげられたのである。

アジア的生産様式の社会は氏族制が色あせて階級社会に移行した処に生じたものであるが、別に氏族制共産社会に適応せしめるものもあり、また古代奴隷社会に適応せしめるものもあるのである。更にまた支那社会の特殊性の観点からして宋朝以来明瞭な構成をもった官僚階級の支配を指すものもある。勿論この場合においてはその主張は創唱者の意味とは何等の関係も無いのである。この意味に於ては、アジア的生産様式を支那社会のすべての時代に通ずるものとして考える方法も理窟の上ではあり得るのである。ただこの場合はアジア的生産様式の内容がかかるものとして別に示されなければならない筈である。

勿論この意味に於ては逆にアジア的生産様式の存在を否認する立場もあり得る。この主張をなす者はただ封建社会の東洋的特殊性の若干を認めようとするのである。

この「アジア的生産様式」が創唱者によっていかなる構造を与えられていたかの問題は今日、東洋社会の現実的な姿を闡明することに比してそうまで重要なことではないのである。元来この問題が熱心に論議の対象となった理由は、一九二五―二七年の支那の革命の展開につれて支那社会を正確に規定する必要と関連していたものであったことを想起する必要があるであろう。

支那社会の歴史的特殊性は、その著しい停滞性の上に置かれた農業社会の中に求められる。農業社会こそは農業共同体の時代から現代支那まで貫く支那の本質的な社会だからである。見方によれば支那社会の特質はこの農業共同体の変質の過程にあらわれたものといい得るのである。

この意味においてこの変質過程の枢軸をなした支那の家族制度のつとめて来た役割は極めて重要である。家族史的に言えば支那においても母系氏族時代、父系氏族時代（この時代の後期において父権の確立を見た）の変遷を経て来ているのである。氏族制度の崩壊から大家族制へと移行し、大家族制の崩壊から小家族制への移行は支那に於ても他の社会の場合の経過と同一である。林語堂はその著書の中で繰りかえし支那社会における家族制度の重要性を説いている。

「支那においても原始社会制度は女家長制であった。この証跡は周代にはまだ明らかに残っていた。この時代には苗字又は家族名たる姓が婦人の名前であったのに、男子は出生地又は官位の後へ単に個人名即ち氏を附けたに過ぎなかった。」（林語堂、『我国土・我国民』）

林語堂は、経済史的に見ないのでフェミニストらしく「儒教が起って婦人の幽閉を齎した。そして男女の間は間もなく儒者によって隔離された」と嘆じている。

家族制度の現代支那社会における重要性については彼は次のように述べている。

「家族制度は支那社会の根柢であり、ここから支那一切の社会

的特徴が起源するからである。家族制度と村落制度（これは一段と高い型に引上げられた家族だが）この二つが支那人の社会生活の上に於て説明しなければならないものである。面子、人望、特権、感謝、礼儀、公然たる賄賂、公共機関、学校、会館（ギルド）、博愛、款待、正義、そして最後に支那の政治全体等これら一切のものが家族及び村落制度から生ずるのであり、一切がこの制度から彼等に特有な性質を藉り、その特性に対する説明をそこに求めて始めて納得がゆくのである。何故なら家族制度から家族的精神が生じ、この家族的精神から社会的行為に対する規約が生じるからだ。」（林語堂、前掲書、新居格氏訳二八二頁）

この家族制度と村落制度（この二者は密接に結びついたものである）とは歴史的にもまた支那社会の核心をなすものであることは言うまでもない。

陶希聖は家族制度と国家権力の結びつきの関係を次の如くに説明しているのである。

即ち「支那の大家族制度は、世禄という世襲財産を物質的基礎とする父系、父権、父治の制度であるが、周朝の専制的国家権力形態を見るにこれも世襲的領土を物質的基礎とする父系、父権、父治の制度であって、大家族制度に倣って創造されたものであり、しかも国家権力者は氏族の家長であった。また始めは父長でなくても国家権力の掌握後にはその首長となったのである」と。

秋沢修二氏は支那社会の根本的特徴として「父家長制的専制主義」を挙げている。即ち、

「支那社会経済の全領域の上に君臨している父家長制的専制的国家権力及び全支那社会構造の父家長制的専制主義的性格。――我々はこれを、周代から極く近代に至るまでの支那社会史上の殆どすべての時代に亙って――即ち、支那奴隷制社会においても、支那封建制社会においても、同様に――見ることが出来るのである。この意味において、父家長制的デスポティスムスは支那社会の根本特徴であると言い得るであろう。そして、このデスポティスムスは非常に多くの場合、官人支配体制（専制的官僚主義＝官人的ヒエラルヒー）という形態をとっている」（秋沢修二氏、『支那社会構成』、二三頁）

この父家長制、或いは父権制的、専制主義が、数千年来の歴史と、生産関係の変遷とを伴う支那社会を貫いて、どれだけその各々の時代をあまさず説得し得るかは問題であり、かつ官人支配体制主義が、支那社会の根本的な性格を決定している一つの重要な力であることは間違いのないところと思う。

支那社会のかくの如き停滞性の原因が、農業共同体的遺制の根強い生存に因ることは、我々が現代支那の村落や家族制度の観察に基づいてほぼ問題のないところであるとしても、しからば何故にその農村共同体的性質が保存されたかという点はたしかに重要なる研究題目であろう。

その原因は、それ自体の内部と外部とに存在していたのであろう。

内部的には父権制、宗族制的構成が結合の紐帯をなしていた

という事実の他に支那農業の特殊性――特に水田農業の性質にも関係があると思われる。また例えばロイ[註]が述べているように家畜の飼育が全般的とならなかったことなども一顧には値する問題である。

註　M・N・ロイ『支那における革命と反革命』参照、ただしこの場合ロイは更に何故に家畜の飼育が行われなかったかを究明すべきであった。それは奴隷的な農民が家畜の代用をなしたからである。ワグナーは「支那では通常人間が輓獣の代りをする」と述べている。

外的原因については支那が資本主義列強の進攻をうけるまでは、周囲に支那社会を破壊、吸収するに足る強力な社会を持たなかったことである。支那はしばしば外族の侵略を受け、また征服を蒙ったがこれらの場合外族は極めて低い程度の社会構成と文化水準とを持っていたに過ぎないのである。稲葉博士や、林語堂などが外族の侵略がかえって支那の若返り作用をなしたという説をなしているのはこのような条件が存在したがためである。

なお、この問題については筆者は現在充分これを説明し得る点に到達していないのでここにはただ、この程度にふれるだけにとどめよう。

支那歴史の区分

悠久なる支那の歴史をさかのぼってみると、石器時代はもとより、全く伝説の中に現われて来る伏羲氏であるとか神農氏であるとか、黄帝、堯、舜、更に禹の時代、下って殷の時代は、既に一種の神話伝説の時代として取扱うべきであって、筆者がここに取扱うべき問題ではない。しかしながらこの神話伝説の中にも後の世に語り継がれた黄帝や堯・舜、或いは禹などの農耕技術に関する物語、更に治水事業に傾けた努力等は支那社会の特質闡明の上で全く無関係の問題ではないのである。しかしながら何分にもこれらの時代は伝説の時代であり、これを分類の対象とすることは現代支那社会の特質を問題とする場合大して意味がないのである。

支那歴史の区分法は、易姓革命による王朝の交替の順を逐うて年代的に区切って行くような方法もあり、我々が東洋史を学ぶ場合に普通従って来たのはそういう方法であった。しかしながら支那社会の本質を究明することを問題にする場合には支那社会・経済の本質の変化に直接触れた区分方法が更に意味を持って来ると思われるのである。

ここにはそうした目的でもって二、三の区分法を参考のために掲げることとする。

第一に前記の秋沢氏の支那史における社会構成の継起的発展の概観を要約すれば次の如くである。秋沢氏のこの近業は注目すべき労作である。

一、奴隷所有者的社会構成の時代

殷代末期および周代初期は種族奴隷の時代であるが、これは特に周代に入って明確に見られた。捕虜となった殷人は征服者たる周人の間に分配され、奴隷として主として農業労働に駆使された。

春秋時代に至ると、手工業が農業から分離して独立した生産部門となり、このように発展した分業の上に商業が発展する。またかくて奴隷売買が一般に行われるに至る。

春秋時代は、父家長制的＝家内奴隷制と並んで生産奴隷制が発生する時代と見ることが出来る。

生産奴隷制の発展に伴って諸国家は奴隷と土地とを獲得せんとして絶えず抗争した。かくて所謂「戦国時代」の争乱があらわれるのである。戦国の争乱は奴隷獲得の戦争であり、戦国時代の社会は基本的に奴隷社会である。

秦・漢時代においてもこのような奴隷労働による農業生産は――特に広大な官有地において――行われたことは明らかである。

一般に戦国時代、秦・漢（前漢）時代における奴隷制の発展は、この時代における商工業の発展、商人資本の蓄積と密接な相互規定的関係を有している。商工業的富者は巨大なる奴隷所有者であった。また秦漢・時代における巨大なる官営工場（マニュファクチュア）においては莫大な数の官有奴隷が使役された。

秦朝の厖大なる土木建築事業は捕虜および犯罪人よりなる官有奴隷の労働力をもって行われたものであった。

二、奴隷所有者的構成から封建的構成への転化の時代

漢以後隋・唐に到る期間は、奴隷所有者的社会構成が解体して封建的社会構成が成立する時期である。

漢末より唐に至るまでの支那社会においては、奴隷制と農奴制とは相互制約的に特徴的な仕方で相関し絡み合った。

この時代においては、後漢の滅亡、五胡の侵入によって社会は自然経済にと逆転し、より原始的な奴隷制――部民型奴隷制の如き――が行われた。そしてこの時代に支那は南北支那に分離し、南支那（南朝）においては大土地所有が行われたが、北支那（北朝）においては均田制が行われた。南北朝時代においては、少くとも北支那の多くの諸国では大体において、奴隷制が支配的な生産様式をなしていたように思われる。

五胡十六国時代は、奴隷制、自然経済への逆転の時代である。

北朝の奴隷制は農業生産力の破壊、退歩と密接な関連がある。北方の農民が大挙南方に移動し始めた頃、南朝では既に荘園が出来上りつつあり、これら農民は佃戸（小作人）として、また奴隷として荘園に吸収された。南朝においては農奴制がかなり発達していたようである。だがこの場合にも農奴制はまだ奴隷制と相互制約的な関係にあった。